

<原著>

少子社会における次世代育成力に関する調査

齋藤幸子¹⁾ 星山佳治²⁾ 宮原忍¹⁾

1) 日本子ども家庭総合研究所 2) 人間総合科学大学所属

Studies on the Personal and Social Generativity in the Low Fertility Society
: A Survey on the Attitude toward Nurturing the Next GenerationSachiko SAITO¹⁾, Yoshiharu HOSHIYAMA²⁾, Shinobu MIYAHARA¹⁾

1) Japan Child and Family Research Institute

2) University of Human Arts and Sciences

抄録

目的 少子化現象を世代の再生産の問題として捉え直すため、世代継承の視点から、“generativity”に注目し、人格の成熟と次世代育成力の関連を調べることを目的とした。

方法 人格成熟の指標として EPSI (エリクソン心理社会的段階目録検査 Erikson psychosocial stage inventory) を取り入れた調査票を作成し、25～54歳の男女を対象とした調査を行った。有効回答 635 人を EPSI 総得点の高低で比較することにより、2 題の仮説を検討した。仮説 1 は「全体のバランスのとれた人格の成熟が、次世代を育成しようとする力を生み出す」、仮説 2 は「多様な他者に関わり世話を受ける環境が、次世代を育成しようとする人格の発達を促す」である。

結果 EPSI 総得点は、既婚率、未婚者の結婚の意志、既婚者の性生活、希望子ども数、世代継承観のすべての項目との間で正の関連がみられた。すなわち、仮説の 1 が支持された。また、高得点群は、成育家庭の雰囲気、両親の夫婦像、父母からの接し方、異世代の人々との交流、成長過程で世話になったと感じる人、で低得点群との間に有意な差が認められた。すなわち、仮説の 2 も支持された。

結論 エリクソンの理論による人格の成熟度の高い者は次世代育成力が高いと言えた。その背景因子として、1) 成育家庭の雰囲気が自由で開放的・ユーモアと安らぎがあること、2) 両親は価値観が共通し、互いに個性を尊重していたこと、3) 同世代・異世代を含む家庭外での多様な人との触れ合う経験が豊富であったことがあげられた。すなわち、家庭および家庭外の地域・学校・企業内などそれぞれの場面で、人から人への次世代育成力の継承・再生産が行われる体制の再建こそが、わが国の次世代育成力を高めることに繋がると言える。

キーワード : 少子化, generativity, 生殖性, EPSI, 希望子ども数, 世代継承

Abstract

Decreased fertility in Japanese society was considered a problem of the generation succession, and E.H. Erikson's concept of “generativity” was found to be useful to study the problem from this point of view. A questionnaire was created to survey men and women of 24-54 years of age. In October 2002, 635 answer sheets were collected.

The questionnaire included the following terms: demographic attributes, communication with different generations, marital state, sexual life, wanted number of children, background, EPSI (Erikson psychosocial stage inventory), avoidant personality, sympathetic experience, opinion on the generation succession. Comparison between the EPSI high-scoring group and the low-scoring group revealed that the high EPSI group had wanted a high number of children, positive opinion on generation succession, etc.

Keywords: decreased fertility, generativity, EPSI, wanted number of children, generation succession

(Accepted for publication, September 30, 2004)

[平成 16 年 9 月 30 日受理]

〒106-8580 東京都港区南麻布 5-6-8

5-6-8 Minami Azabu, Minato-ku, Tokyo, 106-8580, Japan.

I 緒言

本研究は、日本の少子化問題研究の一環として行った。わが国では平成元年の合計特殊出生率が史上最低を記録し「1.57 ショック」と称されて以来、少子化対策として様々な施策がなされていた。しかし平成14年1月発表の「日本の将来推計人口」では、合計特殊出生率が1.32を示すに至った。さらに「晩婚化から非婚化へ」「夫婦の出生力そのものの低下」という新たな現象も明らかになり、少子化の流れは未だに変えることが出来ない。

これを受けて政府は「少子化対策プラスワン」の公表（平成14年9月）、「次世代育成対策推進法」（平成15年7月）の公布などに至っている。「少子化対策プラスワン」の基本的考え方の中には「社会保障をはじめとして、わが国の社会経済全体にこれまでに予測した以上に急速な構造的変化をもたらしていくことが予想され、（以下略）」とあるように、少子化は主に経済、特に、社会保障の問題が先行して論じられてきたといえる。

またその施策においては、次世代育成対策推進法の基本理念に「保護者が子育てについての第一義的責任を有する（中略）家庭その他の場において、子育ての意義についての理解が深められ、かつ、子育てに伴う喜びが実感されるように配慮」とあるように、子どもを育てる親（家庭）への支援が基本の枠組みである。

筆者らは、平成9年以来少子化に関連する研究調査に関わってきたが、少子化の進行はすでに避けられない状況であることを認識した。少子高齢社会で次世代を育成していくためには、新たな研究の枠組みが必要と考え、少子化を個人および社会の養育力の問題として捉え直すこととした。世代の再生産・世代継承のあり方に注目し、個人及び社会の再生産能力=次世代育成力を育む社会のあり方を検討する資料を得ることを研究の目的とした。

II 研究方法

1. 仮説について

表1にE.H.エリクソンの人生発達段階の漸成図式のうち心理社会的危機の対立命題を示した。われわれは生殖の上位概念として、エリクソンが彼の漸成図式の成人期の課題として取り上げた“generativity”に注目した。一般に“generativity”は表に示すように「生殖性」と訳されるが、「世代性」¹⁾「生成継承性」²⁾³⁾との訳もみられる。“generativity”は“reproduction”あるいは“procreation”と区別してエリクソンが用いた造語であり、「子孫を生み出すこと（procreation）、生産性（reproduction）、創造性（creativity）」を包含する概念である。また生殖性対停滞という対立命題から現れる新たな「徳」として「世話（care）」が重視されている。またエリクソンは“generativity”の課題遂行には「前成人期に至るこれまでの発達過程で順次生まれてきた強さ（希望と意志、目的と技術、忠誠と愛）は次の

表1 エリクソンによる人生発達段階心理・社会的危機

VIII 老年期	統合 対 絶望、嫌悪
VII 成人期	生殖性 対 停滞
VI 前成人期	親密 対 孤立
V 青年期	同一性 対 同一性の混乱
IV 学童期	勤勉性 対 劣等感
III 遊戯期	自主性 対 罪悪感
II 幼児初期	自律性 対 恥、疑惑
I 乳児期	基本的信頼 対 基本的不信

世代の強さを育むという、この世代継承的課題に必要な不可欠なものとしている。すなわち、前成人期までの人間生活そのものの「蓄え」が大切としている⁴⁾。

筆者らは、この“generativity”が次世代育成力の中核をなすものと考え、人の成熟と次世代育成力との関連について検証するため2題の仮説をたて検証した。

仮説1：全体のバランスのとれた人格の成熟が、次世代を育成しようとする力を生み出す。

仮説2：多様な他者に関わり世話を受ける環境が、次世代を育成しようとする人格の発達を促す。

2. 調査内容

成人期の人格の成熟度を測る方法として、EPSI (Erikson psychosocial stage inventory エリクソン心理社会的段階目録検査)を採用した。EPSIとは、オーストリアのRosenthalによって開発され(1981)、その後、中西と佐方(1983)によって、日本語版が作成された⁵⁾。エリクソンの漸成図式にそった乳児期から老年期までの発達課題(信頼性、自律性、自主性、勤勉性、同一性、親密性、生殖性、統合性)に対応した8尺度それぞれに下位尺度7項目ずつ、計56項目の質問で構成された5件法の日録検査である(表2)。EPSI総得点を人格の成熟度の指標として、以下の内容でアンケート調査を行った。

1. EPSI (エリクソン心理社会的段階目録検査)
2. 結婚・子どもについて
3. 世代継承観
4. 成育環境
5. 人との交流関係
6. 回避型人格傾向
7. 共感体験

3. 調査方法及び対象

オンライン調査業者を通じ、25～54歳の男女モニター2,900人にEメールによる依頼文を送り、インターネット経由で回答を得た。2,900人は、全国364,883人(2002年10月1日時点)のモニター会員の中から年齢範囲を指定しランダムに選ばれた。性別・10歳区切りの年齢層別6グループごとに先着およそ100名ずつを有効回答とした。集計対象は25～34歳(男性104名・女性107名)、35～44歳(男性107

表2 EPSI の項目内容 (5 件法: 註参照)

信頼性	同一性
1.*私に、もっと自分をコントロールする力があればよいと思う	29. 私は、自分が何になりたいのかをはっきりと考えている
2.*良いことは決して長続きしないと、私は思う	30.*私は、自分が混乱しているように感じている
3. 私は、世間の人々を信頼している	31. 私は、自分がどんな人間であるのかをよく知っている
4. 周りの人々は、私のことをよく理解してくれている	32.*私は、自分の人生をどのように生きたいかを自分で決められ
5.*私には、何事も最悪の事態になるような気がしてくる	33.*私は、自分のしていることを本当はわかっていない
6. 世の中は、いつも自分にとってよい方向に向かっている	34. 私は、自分が好きだし、自分に誇りをもっている
7.*周りの人々は、私を理解してくれない	35.*私には、充実感がない
自律性	親密性
8.*私は、何事にも優柔不断である	36.*誰かに個人的な話をされると、私は当惑してしまう
9.*私は、決断する力が弱い	37. 私は、特定の人と深いつきあいができる
10.*私は、自分という存在を恥ずかしく思っている	38. 私は、あたたかく親切的な人間である
11. 私は、自分で選んだり決めたりするのが好きである	39.*私は、もともと1人ぼっちである
12.*私は、自分の判断に自信がない	40. 私は、他の人々と親密な関係を持っている
13.*私は、この世の中でうまくやっつこうなどとは決して思わない	41.*私は、他の人よりも目立つのを好まない
14. 私は、物事をありのままに受け入れることができる	42.*私は、他の人々となかなか親しくなれない
自主性	生殖性
15.*私には、みんなが持っている能力が欠けているようである	43. 私は、後輩や部下のめんどろをよく見る
16.*私は、誰か他の人がアイデアをだしてくれることをあてにしてい	44. 私は、将来に残すことのできる業績をあげつつある
17. 私は、多くのことをこなせる精力的な人間である	45. 私は、よい親である(親になる)自信がある
18.*たとえ本当のことであっても、私は否定してしまうかもしれない	46.*私は、後輩や部下を指導するのが苦手である
19.*私は、リーダーというよりも、むしろ後に従っていくほうの人間	47.*私は、自分を甘やかすところがある
20.*私は、いろいろなことに対して罪悪感を持っている	48.*私は、親であること(親になること)が不安である
21. 私は、してはいけないことに対して、自分でコントロールできる	49. 私は、未来を担う子どもたちを育てていきたいと思う
勤勉性	統合性
22. 私は、いっしょうけんめいに仕事や勉強をする	50.*私は、自分が死ぬことを考えると不安である
23. 私は、自分が役に立つ人間であると思う	51. 私のこれまでの人生は、かけがえのないものだと思う
24. 私は、目的を達成しようががんばっている	52.*私は、生きがいをなくしてしまっている
25. 私は、自分の仕事をうまくこなすことができる	53. 私は、悔いのない人生を歩んでいる
26.*私は、物事を完成させるのが苦手である	54. 私は、自分の死というものを受け入れることができる
27.*私は、のりくらりしながら多くの時間をむだにしている	55.*私には、もっと別の生き方があるのではないかと思う
28.*私は、頭を使ったり、技術のいる事柄はあまり得意ではない	56.*私の人生は、失敗の連続のように思う

表2の註:5件法は、とてもよく当てはまる4点、かなり当てはまる3点、あまり当てはまらない2点、ほとんど当てはまらない1点、全く当てはまらない0点として計算する。ただし、*印は逆転項目であり、とてもよく当てはまる0点～全く当てはまらない4点として計算する。

出典:中西信男, 佐方哲彦. EPSI—エリクソン心理社会的段階目録検査—. 上里一郎監修. 心理アセスメントハンドブック. 第2版. 新潟: 西村書店; 2001.6. p.365-76.

名・女性 104 名), 45～54 歳 (男性 106 名・女性 107 名) の計 635 名である。対象の居住地は、全都道府県に渡っている。調査時期は 2002 年 10 月であった。

対象の属性、学歴・職業・既婚率・希望子ども数などについて、わが国の平均的な指標と考えられる資料と対照した結果⁶⁷⁾、高学歴 (大学卒の男性は 54%・女性 31%) と専業主婦の割合 (50%) がやや高い傾向が認められた。

III 結果

以下の分析では、年齢・EPSI 総得点によって 3 群に分けた場合の比較において、順序変数の項目については Kruskal-Wallis の順位和検定で、多重比較は Scheffe の方法で行った。それ以外は t 検定もしくは χ^2 検定で行った。以下「差がある」とした項目は、危険率 5% 以下で有意な差があることを示す。

1. EPSI 得点の性別・年齢別検討および尺度間相関

表 3-1 に性別・年齢群別それぞれの EPSI 平均値を示した。総得点では男性 125.94、女性 125.83 と性差は認められなかった。尺度別に検討すると、8 尺度中 4 尺度で性差がみられた。信頼性と親密性では女性の値が高く、勤勉性と生殖性では男性の値が高かった。

年齢の影響を見るために 25～34 歳を A 群、35～44 歳を B 群、45～54 歳を C 群として検討したところ、総得点では 3 群間で差があり、対比較においても A-C 群間および B-C 間

で差が認められた。尺度別にみると、自律性・自主性・勤勉性・同一性・生殖性で 3 群間に差があった。対比較では、自律性・自主性・勤勉性・生殖性で A-C 群間に、同一性では B-C 間に差が認められ、いずれも C 群の値が他群に比べ高かった。

さらに、表 3-2 には性・年齢群別 EPSI 平均値を示した。男性では 3 群間の差が認められず、対比較の勤勉性のみで C 群が A 群より高いという結果であった。一方女性では、総得点で 3 群間に差が認められ、自律性・自主性・勤勉性・同一性・生殖性の 5 尺度で A 群に比べ C 群が高かった。すなわち、全体の年齢別得点差は女性のデータに因るところが大きいといえよう。

表 4 に尺度間の相関を示した。総得点と各尺度との相関係数が 0.740～0.870、尺度間の相関係数 0.455～0.722、生殖性と各尺度との相関係数は 0.474～0.660 とそれぞれ関連が認められた。

2. EPSI 総得点高低別検討

EPSI 総得点の高い方からおよそ 30 パーセントイルを高得点群 (139～199 点)、低い方からおよそ 30 パーセントイルを低得点群 (24～114 点)、その間を中間群 (115～138 点) と 3 群に分けて検討した。対象数の内訳は、高得点群 (以下 H 群とする) 207 名、中間群 (以下 M 群とする) 223 名、低得点群 (以下 L 群とする) 205 名であった。

表 5 に H・M・L の 3 群別に EPSI 尺度別平均値を示した。

表 3-1 性別・年齢別 EPISI 総得点平均値

	男性	女性	T検定	A群 B群 C群			順位和検定	対比較		
				25~34歳	35~44歳	45~54歳		A-B	A-C	B-C
信頼性	13.67	15.13	*	14.11	14.35	14.74				
自律性	16.59	16.70		16.02	16.51	17.39	*	*		
自主性	15.75	15.20		15.08	15.23	16.11	*	*		
勤勉性	17.44	16.68	*	16.37	16.9	17.91	*	*		
同一性	16.68	16.69		16.43	16.19	17.44	*		*	
親密性	15.60	16.32	*	16.18	15.62	16.08				
生殖性	14.64	13.47	*	13.36	14.07	14.73	*	*		
統合性	15.56	15.65		15.79	15.17	15.85				
総得点	125.94	125.83		123.35	124.03	130.24	*	*	*	

表 3-2 性・年齢群別 EPISI 平均値

	男性					女性				
	A群 B群 C群			順位和検定	A-C比較	A群 B群 C群			順位和検定	A-C比較
	25~34歳	35~44歳	45~54歳			25~34歳	35~44歳	45~54歳		
信頼性	13.57	13.36	14.09			14.64	15.38	15.37		
自律性	16.13	16.36	17.25			15.91	16.66	17.51	*	*
自主性	15.79	15.25	16.23			14.39	15.2	16.00	*	*
勤勉性	16.91	17.00	18.42		*	15.84	16.79	17.41	*	*
同一性	17.06	15.91	17.10			15.81	16.48	17.78	*	*
親密性	16.06	15.21	15.56			16.30	16.04	16.61		
生殖性	14.30	14.53	15.09			12.46	13.60	14.36	*	*
統合性	15.89	15.04	15.75			15.69	15.31	15.94		
総得点	125.71	122.65	129.49			121.05	125.45	130.99	*	*

表 4 EPISI 尺度間相関表

	総得点	信頼性	自律性	自主性	勤勉性	同一性	親密性	生殖性	統合性
総得点	1.000								
信頼性	0.740	1.000							
自律性	0.819	0.559	1.000						
自主性	0.821	0.513	0.722	1.000					
勤勉性	0.795	0.455	0.603	0.648	1.000				
同一性	0.870	0.597	0.674	0.675	0.656	1.000			
親密性	0.760	0.572	0.541	0.561	0.511	0.593	1.000		
生殖性	0.764	0.474	0.542	0.583	0.660	0.572	0.529	1.000	
統合性	0.768	0.565	0.536	0.515	0.506	0.695	0.526	0.497	1.000

表 5 EPISI 総得点高低群別平均値

	全体		H群 (n=207)		M群 (n=223)		L群 (n=205)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
信頼性	14.4	3.72	17.33	2.64	14.38	2.80	11.47	3.16
自律性	16.64	4.30	20.59	2.94	16.80	2.44	12.48	2.99
自主性	15.48	3.89	19.05	2.74	15.39	2.40	11.95	2.75
勤勉性	17.06	4.06	20.46	2.91	17.12	2.57	13.57	3.38
同一性	16.69	4.76	21.26	3.06	16.62	2.45	12.15	3.54
親密性	15.96	4.05	19.52	2.83	15.54	3.07	12.82	3.09
生殖性	14.06	4.02	17.24	3.13	14.02	2.76	10.88	3.40
統合性	15.60	4.26	19.33	3.34	15.36	2.80	12.10	3.16
総得点	125.89	26.24	154.78	12.98	125.23	6.64	97.42	16.17

いずれの尺度も、H・M・Lの順に値が高く、総得点の高いH群は8尺度とも得点が高い傾向があり、総得点の低いL群は8尺度とも低い傾向がある。人格の全体的な発達が認められる。

表6~11に示すように、調査項目についてH・M・L3群間の比較を行った結果、希望子ども数・次世代への世代継承観など多くの設問で3群間に有意な差が認められ、多重比較においてはH群とL群の間で差が顕著であった。よって以下では、H群207名とL群205名を比較した結果について主に報告する。

(1)属性

表6にH・M・L群別に性比、平均年齢、学歴、同居人について示した。性比では、3群間および対比較ともに差がなかった。平均年齢では差が認められ、H群40.23歳・L群37.68歳とH群の年齢が高い。

学歴について「中学卒～短大卒」を合わせた割合と「大学・大学院卒」を合わせた割合を3群間で比較すると差が認められた。大学卒ではH群49.3%・L群35.6%とH群の割合が高く、高校卒・専門学校卒はL群の割合が高かった。全体の高校卒149名・大学卒268名のEPISI総得点の平均値を算出すると、高校卒121.5点・大学卒130.1点で有意な差が認め

表6 回答者の属性

	合計 (N=635)		H群 (n=207)		M群 (n=223)		L群 (n=205)		3 群 比較	L-H 比較
	N	%	N	%	N	%	N	%		
性別										
男性	317	49.9	108	52.2	101	45.3	108	52.7		
女性	318	50.1	99	47.8	122	54.7	97	47.3		
平均年齢・標準偏差	39.20	8.38	40.23	8.41	39.65	8.16	37.68	8.39	*	*
最終学歴										
1. 中学	7	1.1	1	0.5	1	0.4	5	2.4		
2. 高校	149	23.5	36	17.4	56	25.1	57	27.8		*
3. 専門・専修学校	92	14.5	22	10.6	31	13.9	39	19.0		*
4. 短大・高専	85	13.4	28	13.5	35	15.7	22	10.7	*	
5. 大学	268	42.2	102	49.3	93	41.7	73	35.6		*
6. 大学院	31	4.9	17	8.2	6	2.7	8	3.9		
7. その他	3	0.5	1	0.5	1	0.4	1	0.5		
同居人 (重複回答)										
1. 一人暮らし	83	13.1	23	11.1	25	11.2	35	17.1		
2. 配偶者と (パートナーと)	435	68.5	156	75.4	165	74.0	114	55.6	*	*
3. 子どもと	336	52.9	121	58.5	129	57.8	86	42.0	*	*
4. 親と	170	26.8	51	24.6	58	26.0	61	29.8		
5. 祖父母と	11	1.7	4	1.9	4	1.8	3	1.5		
6. 恋人と	6	0.9	2	1.0	3	1.3	1	0.5		
7. その他	25	3.9	6	2.9	5	2.2	14	6.8		
子ども数平均・標準偏差 (子どもあり限定)	1.93	0.70	1.97	0.70	1.88	0.70	1.95	0.68		

* p<0.05

られた。

同居関係では、「子どもと同居」「配偶者と同居」で3群間に差が認められ、「配偶者と同居」はH群75.4%・L群55.6%、「子どもと同居」はH群58.5%・L群42.0%といずれもH群の割合が高い。すなわちH群の方が既婚者と子どものいる人が多かった。子どもの人数については、子どもと同居していると答えた人限定で平均値を算出した結果、差はなかった。

その他の属性としては、職業では顕著な差は認められず、「主婦」の占める割合もH群24.2%・L群22.0%とほぼ同じであった。職種では「事務」は、H群10.6%・L群18.5%とL群の割合が高く、「営業・販売」ではH群14.5%・L群6.8%とH群が高かった。

(2)仮説1の検討

1) 結婚・性・子ども

表7の婚姻関係では「結婚している」と「未婚」の割合を3群間で比較したところ差が認められた。H-L群間の比較では「結婚している」はH群74.9%・L群56.1%、「未婚」はH群20.3%・L群37.6%で、H群の婚姻率が高かった。

同じく表7で、未婚者(H群77人・L群42人)の結婚の意思について、「結婚したい」とそれ以外の回答「パートナーなら欲しい」「一生ひとり」を合わせた割合を3群間で比較したところ、差が認められた。H-L群間では「結婚したい」はH群85.7%・L群46.8%でH群の割合が高く、「パートナーならほしい」はH群11.9%・L群31.2%でL群が高かった。また、「一生妻または夫、パートナーはいらない」はH群0%・L群9.1%であり、未婚者ではH群の方が結婚に積極的であった。

既婚者(H群115人・L群188人)の性生活については、「普通にある」とそれ以外の回答「あまりない・ない」を合わせた割合を比較したところ3群間に差が認められた。「普

表7 結婚・性生活・子どもについて

	合計 (N=635)		H群 (n=207)		M群 (n=223)		L群 (n=205)		3 群 比較	L-H 比較
	N	%	N	%	N	%	N	%		
婚姻関係										
1. 結婚している (配偶者またはパートナーがいる)	437	68.8	155	74.9	167	74.9	115	56.1	*	*
2. 未婚	166	26.1	42	20.3	47	21.1	77	37.6		
3. その他 (離別・死別)	32	5.0	10	4.8	9	4.0	13	6.3		
結婚の意思 (未婚者限定)										
1. 結婚する、または結婚したい (時期は問わず)	100	15.7	36	17.4	28	12.6	36	17.6	*	*
2. 結婚はしたくないが、パートナーとなる異性が欲しい	38	6.0	5	2.4	9	4.0	24	11.7		*
3. 一生、夫または妻・パートナーはいらない	9	1.4	0	0.0	2	0.9	7	3.4		
4. その他	19	3.0	1	0.5	8	3.6	10	4.9		
性生活 (既婚者またはパートナーあり限定)										
1. 普通にある	189	29.8	74	35.7	79	35.4	36	17.6		*
2. あまりない	180	28.3	63	30.4	59	26.5	58	28.3		*
3. ない	68	10.7	18	8.7	29	13.0	21	10.2		
希望子ども数平均・標準偏差	1.93	0.99	2.17	0.88	1.87	0.93	1.76	1.1	*	*

通にある」が H 群 47.7%・L 群 31.3%と H 群の割合が高かった。

希望子ども数平均値については、3 群間で差が認められ、H 群 2.17 人・L 群 1.76 人と H 群の希望子ども数が多かった。

2) 世代継承観

次世代への継承観・親世代からの継承観について、それぞれ 7 項目ずつマルチ・アンサーで回答を求め、表 8 に示した。「次世代への継承」については、多くの項目で 3 群間に差が認められ、H 群の方が L 群に比べて、次世代のことを配慮し、養育に責任を感じていた。H 群の割合が L 群に比べて高かった項目は、「1. 次世代に残したいものがある」H 群 52.7%・L 群 22.9%、「2. 子どもを生み育てることは大切」H 群 76.3%・L 群 46.8%、「3. 次世代への配慮や世話が大切」H 群 68.1%・L 群 32.7%、「4. 社会全体に養育責任あり」H 群 71.0%・L 群 52.7%であった。一方、L 群の割合が高かった項目は「5. 自分達の事で精一杯」H 群 3.9%・L 群 27.8%、「6. 若い世代の考え方が理解できない」H 群 4.8%・L 群 17.1%であった。

同じく表 8 の「親世代からの継承」についてみると、次の 3 項目で 3 群間に差があり、H 群の方が L 群に比べて、親世代から受け継ぐものを大切にしようと考えていた。「8. 物的財産を大切にしたい」H 群 58.0%・L 群 38.0%、「9. 知的財産を大切にしたい」H 群 85.5%・L 群 67.3%である。一方、「10. 親世代は、今の親より子どもを可愛がった」は H 群 23.2%・L 群 32.7%で L 群の割合が高かった。

以上、既婚率、希望子ども数、未婚者の結婚への意思、既婚者の性生活、世代継承観の設問すべてにおいて、EPSI 得点との正の関連がみられた。また、EPSI 総得点の高い群は、各尺度の得点も高く全体的な人格の発達が認められた。よって、仮説 1「全体のバランスのとれた人格の成熟が、次世代を育成しようとする力を生み出す」は支持されたと言える。

(3)仮説 2 の検討

1) 育った家庭の環境

育ってきた家庭ついて、雰囲気、父母の夫婦像は各項目については「はい」「いいえ」「どちらとも言えない」から 1 つを選択、回答者に対する父の接し方、母の接し方については、父母 5 項目ずつについてマルチ・アンサーで回答を求め、表 9 に示した。

育った家庭の雰囲気では、3 群間に差が認められて H 群が L 群に比べて割合が高かった項目は、「1. 自由な話し合いがあった」H 群 44.4%・L 群 25.9%、「2. 付き合いが開放的であった」H 群 39.1%・L 群 21.0%、「3. ユーモアと安らぎがあった」H 群 50.2%・L 群 31.2%となっていた。「4. 批判的であった」「5. 厳格で息苦しい雰囲気であった」では、3 群間では差がなかったが、H 群で「いいえ」と否定する割合が L 群に比べ高かった。

回答者が育てられていた頃の両親の夫婦像について、3 群間で差が認められて H 群が L 群に比べて割合が高かった項

表 8 世代継承観

	合計 (N=635)		H群 (n=207)		M群 (n=223)		L群 (n=205)		3 群比較	L-H 比較
	N	%	N	%	N	%	N	%		
次世代へ										
1. 私は、次の世代に残したいものがある (有形無形含め)	233	36.7	109	52.7	77	34.5	47	22.9	*	*
2. 私にとって、自分の子どもを生み育てることは、大切なことだ	394	62.0	158	76.3	140	62.8	96	46.8	*	*
3. 私にとって、自分の子どもに限らず次世代のために配慮したり世話をすることは、大切なことだ	319	50.2	141	68.1	111	49.8	67	32.7	*	*
4. 子どもは次の時代の担い手だから、社会全体がもっと養育に責任を持つべきだ	381	60.0	147	71.0	126	56.5	108	52.7	*	*
5. 私は、自分達のことで精一杯で、次の世代のことを配慮する余裕がない	98	15.4	8	3.9	33	14.8	57	27.8	*	*
6. 私は、自分より下の世代や子ども世代の考え方が理解できない	66	10.4	10	4.8	21	9.4	35	17.1	*	*
7. 現代は、次世代の育成より、高齢者問題が優先されるべきである	38	6.0	3	1.4	17	7.6	18	8.8		
親世代から										
8. 私は、親や上の世代から伝えられる (物的) 財産を大切にしたい	299	47.1	120	58.0	101	45.3	78	38.0	*	*
9. 私は、親や上の世代から伝えられる「知的財産」や「生活の知恵」を大切にしたい	487	76.7	177	85.5	172	77.1	138	67.3	*	*
10. 私の親世代の方が、今の親より子どもを可愛がったと思う	165	26.0	48	23.2	50	22.4	67	32.7	*	*
11. 私の親世代が若い時の方が、今より子育てしやすい環境だったと思う	278	43.8	96	46.4	93	41.7	89	43.4		
12. 私の親世代は自分達のことで精一杯で、我々世代への配慮が足りなかったと思う	83	13.1	23	11.1	26	11.7	34	16.6		
13. 私は、親や上の世代の考え方が理解できない	15	2.4	2	1.0	4	1.8	9	4.4		
14. 新しい時代には、親世代の価値観は通用しないので、子どもは自分の価値観を作って行けばよい	157	24.7	46	22.2	55	24.7	56	27.3		

表9 育った家庭の環境

	合計 (N=635)		H群 (n=207)		M群 (n=223)		L群 (n=205)		3 群 比較	L-H 比較
	N	%	N	%	N	%	N	%		
雰囲気(はいと答えた割合)										
1. 考えなど自由に話し合い、会話が豊かだった	232	36.5	92	44.4	87	39.0	53	25.9	*	*
2. 様々な人達と付き合いがあり、開放的であった	205	32.3	81	39.1	81	36.3	43	21.0	*	*
3. ユーモアがあり、安らぎがあった	66	10.4	17	8.2	20	9.0	29	14.1	*	*
4. 批判的なことを言い合い、家族仲がよくなった	252	39.7	104	50.2	84	37.7	64	31.2	*	*
5. 厳格で息苦しい雰囲気であった	78	12.3	24	11.6	27	12.1	27	13.2		
父母の夫婦像(はいと答えた割合)										
1. 困ったときに、たすけあい協力していた	359	56.5	128	61.8	118	52.9	113	55.1		
2. 考えや価値観が共通していた	200	31.5	79	38.2	66	29.6	55	26.8		*
3. お互いの考えや個性を尊重していた	234	36.9	94	45.4	70	31.4	70	34.1		*
4. 父が主導権をもっていた	331	52.1	110	53.1	106	47.5	115	56.1		
5. 仲のよい夫婦だった	320	50.4	116	56.0	106	47.5	98	47.8		
父について(重複回答)										
1. 父は私に、なにを・どのようにすべきか、指示していた	110	17.3	42	20.3	29	13.0	39	19.0		
2. 父は、私の考えや感じていることに耳を傾けてくれた	126	19.8	56	27.1	43	19.3	27	13.2	*	*
3. 父は、私の行動に口をはさまないが、気づかってくれていた	317	49.9	115	55.6	109	48.9	93	45.4		*
4. 私は父に「男らしく」または「女らしく」するように言われた	66	10.4	30	14.5	17	7.6	19	9.3		
5. 私は父に、尊重されて育った	149	23.5	74	35.7	46	20.6	29	14.1	*	*
母について(重複回答)										
1. 母は私に、なにを・どのようにすべきか、指示していた	207	32.6	75	36.2	65	29.1	67	32.7		
2. 母は、私の考えや感じていることに耳を傾けてくれた	277	43.6	107	51.7	91	40.8	79	38.5	*	*
3. 母は、私の行動に口をはさまないが、気づかってくれていた	243	38.3	77	37.2	83	37.2	83	40.5		
4. 私は母に「男らしく」または「女らしく」するように言われた	77	12.1	27	13.0	25	11.2	25	12.2		
5. 私は母に、尊重されて育った	203	32.0	91	44.0	66	29.6	46	22.4	*	*

目は、「2. 価値観が共通していた」H群 38.2%・L群 26.8%、「3. 個性を尊重していた」H群 45.4%・L群 26.8%であった。

回答者が中学生から20歳ころまで、父母が回答者にどのように関わっていたかでは、父について3群間で差が認められてH群がL群に比べて割合が高かった項目は、「2. 考えや感じていることに耳を傾けてくれた」H群 27.1%・L群 13.2%、「5. 父に尊重された」H群 35.7%・L群 14.1%であった。「3. 気づかってくれた」ではH群 55.6%・L群 45.4%とH群が高かった。

母についても、父と同じ傾向が認められた。3群間で差が認められてH群がL群に比べて割合が高かった項目は、「2. 考えや感じていることに耳を傾けてくれた」H群 51.7%・L群 38.5%、「5. 母に尊重された」H群 44.0%・L群 22.4%であった。

家庭の雰囲気、両親の夫婦像、父母の接し方については、性別、年齢別にみると、性や世代によって家庭環境のEPSI得点に影響を与える要因は異なっているが、詳細は別稿とする。

2) 異世代・同世代との交流

異世代・同世代との交流について、「1. 交流が多い」「2. 少ない」「3. ほとんどない」からひとつを選択してもらった結果を表10に示した。「1. 交流が多い」とこれ以外の「2. 少ない」「3. ほとんどない」を合わせた割合で比較したところ、

同世代との交流で3群間に差が認められた。全体でみると、同世代との交流に比べ、上下の異世代とは低調であるが、上・下・同世代いずれも「交流が多い」との回答はH群がL群に比べて多く、有意な差がみられたのは、「下の世代と」H群 26.6%・L群 18.0%、「同世代と」H群 90.8%・L群 75.1%であった。

表11は、これまでに「誰から世話を受けて成長してきたと感じているか」について、マルチ・アンサーによる回答である。いずれの群も「母」から世話を受けたと答えた割合が最も高く、次いで「父」であり3群間で差は認められない。祖父母では3群間で差が認められたが、H-L群間では差がなく、M群が他群に比べ低いという結果であった。その他、親戚・きょうだいに世話になったと感じている割合は、差がなかった。

上記の家族・親族以外で、3群間で差が認められH群の割合が有意に高かった項目は、「学校の先生」H群 28.5%・L群 19.5%、「同僚」H群 29.0%・L群 17.6%、「先輩」H群 34.8%・L群 22.4%、「上司」H群 25.1%・L群 16.1%であった。

このように、世話になったと感じている対象は、家族・親族では顕著な差がなく、家族以外の先生・先輩・上司・同僚で差が認められた。家庭内において「世話」をされることの重要性とともに、家族以外で世話をしてくれる人の存在がEPSI得点に寄与していることが示された。前項の異世代・

表 10 世代間交流

	合計 (N=635)		H群 (n=207)		M群 (n=223)		L群 (n=205)		3 群 比較	L-H 比較
	N	%	N	%	N	%	N	%		
上の世代と										
1. 交流が多い	199	31.3	72	34.8	72	32.3	55	26.8		
2. 交流が少ない	282	44.4	96	46.4	95	42.6	91	44.4		
3. ほとんどない	154	24.3	39	18.8	56	25.1	59	28.8		*
下の世代と										
1. 交流が多い	140	22.0	55	26.6	48	21.5	37	18.0		*
2. 交流が少ない	260	40.9	82	39.6	90	40.4	88	42.9		
3. ほとんどない	235	37.0	70	33.8	85	38.1	80	39.0		
同世代と										
1. 交流が多い	538	84.7	188	90.8	196	87.9	154	75.1		*
2. 交流が少ない	81	12.8	17	8.2	22	9.9	42	20.5		*
3. ほとんどない	16	2.5	2	1.0	5	2.2	9	4.4		

表 11 世話を受けて成長してきたと感じる人 (重複回答)

	合計 (N=635)		H群 (n=207)		M群 (n=223)		L群 (n=205)		3 群 比較	L-H 比較	
	N	%	N	%	N	%	N	%			
親 族	1. 父	521	82.0	175	84.5	177	79.4	169	82.4		
	2. 母	608	95.7	198	95.7	211	94.6	199	97.1		
	3. 祖父	106	16.7	42	20.3	23	10.3	41	20.0		*
	4. 祖母	203	32.0	82	39.6	54	24.2	67	32.7		*
	5. きょうだい	185	29.1	56	27.1	57	25.6	72	35.1		
	6. 親戚の人	135	21.3	51	24.6	39	17.5	45	22.0		
親 族 以 外	7. 学校の先生	143	22.5	59	28.5	44	19.7	40	19.5		*
	8. 保母やベビーシッター	8	1.3	3	1.4	2	0.9	3	1.5		*
	9. 友人	290	45.7	106	51.2	98	43.9	86	42.0		
	10. 同僚	119	18.7	60	29.0	23	10.3	36	17.6		*
	11. 先輩	161	25.4	72	34.8	43	19.3	46	22.4		*
	12. 上司	116	18.3	52	25.1	31	13.9	33	16.1		*
	13. その他	26	4.1	10	4.8	7	3.1	9	4.4		

同世代との交流の結果ともあわせて、仮説2「多様な他者に
関わり世話を受ける環境が、次世代を育成しようとする人格
の発達を促す。」は支持されたと言える。

その他人間関係については、回避型人格傾向、共感体験に
ついては設問し有意な差が認められたが、紙面の都合で別稿
とする。

IV 考 察

少子化は再生産 (リプロダクション) の低下を意味する。
リプロダクションとは世代の再生であり継承であるので、出
生率の低下という数量の側面にのみ目を奪われるのではなく、
世代継承の質的側面にも、注目すべきである。また、識
者によって、若者の成熟遅延が語られることが多いが、これ
が少子化の背景としてなんらかの意義を有するのではない
かとの仮説を立てた。成熟の指標として、エリクソンの漸成
図式が有効と考え、これを点数化した EPSI (エリクソン心
理社会的段階目録検査 Erikson psychosocial stage
inventory) を中心として、調査票を考案し、アンケート調
査を行った。その結果、EPSI の得点は家族形成、子産み・
子育て意欲など世代継承に関する、ほとんどすべてに正の関
わりがあることが示された。

この調査の示すところを考察すると、少子時代における次
世代育成力の回復には、成人に達するまでの若い世代のバラ
ンスのとれた人格形成、家族関係をはじめとする世代を超え
た人間関係の構築が必須であると言える。

1. EPSI 得点について

総得点は、中西らが 1980 年代に EPSI 再改訂版作成のた
めに集められた成人のデータでは⁵⁾、男性 129.9・女性 130.1
となっているのに対し、本調査では男性 125.9・女性 125.8
と、男女ともに 5 点ほど低くなっている。本調査は中西らの
調査からおおよそ 20 年後に行われており、この結果が過去 20
年間のわが国成人の EPSI 得点の低下傾向を示しているとな
れば、わが国成人の養育力の低下と少子化の進行とが連動し
ていることが示唆される。しかし、サンプルの取り方や回答
方法が異なっていることを考慮すれば比較対照には慎重を
期す必要があり、今後の検証が必須といえよう。

2. EPSI と属性

EPSI 得点は、全般的には年齢とともに高まって行くと言
えるが、単純な増加傾向ではないことが明らかとなった。こ
れは、中西らの調査で示されている結果と同様であるが⁶⁾尺
度別・性別に見るとその特徴は両調査で異なる部分があっ
た。

中西らの調査では、男性は 40 代前半にピークがみとめら
れ、女性の場合は 30 代前半で下降がみられ、課題によって
かなり異なった発達の变化を示していた。これに対して、本
調査では、男性は 35~44 歳で一度下降し、課題によって異
なった変化をしており、女性は全般的に加齢に応じた発達を
していた。両調査における男女の特徴は、逆転している結果
であった。

この結果については、中西らの調査対象は男性が大手電気メーカー会社員、女性が教育関係の会社のパート勤務の会社員であり、つまり性別と勤務形態という少なくとも2つの要因の混在の影響がみられることが考えられよう。EPSI 得点の加齢ともに高まる傾向は明らかであるが、その形相は、性別で説明できるほど単純ではないと理解できる。

尺度別の性差については、中西らの調査では、信頼性と統合性において女性が、自主性と生殖性においては男性が有意な高得点を得ていたが、本報告では、信頼性と親密性において女性が、勤勉性と生殖性において男性が有意に高得点という結果であった。両調査間では、信頼性と生殖性において同傾向が認められた。また、佐方・中西らが26歳から50代の成人を対象とした調査では⁸⁾、信頼性、同一性、統合性の得点で女性が一貫して男性より高得点を示した。さらに、中西らをはじめに作成した日本語版 EPSI を高校生と大学生に行った結果では⁸⁾、信頼性を除いた他の尺度で男性が高得点を示していた。すなわち、女性は信頼性の高さが一貫した特徴となっている。信頼性の獲得なしに同一性の獲得は困難であることから、中西によれば、「女子青年の自己意識の中では『これこそ自分だ』と思うことより、『この自分は信頼でき、まわりから受け入れられている』という感覚をもつことのほうが重要なのである。同一性の達成という課題に対する男子と女子の構えの違いなのかもしれない」としている。このように中西は、有意義な分析を加えているのであるが、20年前と現在では職場環境や人々の意識も変わっており、また、両調査とも縦断研究ではないので、EPSI の発達の側面に関する分析は以上に止めたい。

次に学歴と EPSI 得点について検討する。EPSI 高得点群に大学卒の割合が高く、学歴の高さが EPSI と関連していた。すなわち、学歴の高いものは EPSI 得点が高く、次世代育成能力も高いという結果と読み取れる。しかし、これは実際の出生数に反映するというわけではないようである。本調査結果で、EPSI 高得点群と低得点群の間で、実際の子ども数では差が見られていない。高卒と大卒を比較しても有意な差は認められなかった。

第11回出生動向基本調査「結婚と出産（夫婦基本調査）」⁷⁾によれば、夫の希望子ども数は、中卒2.57人に対して、大学・大学院卒2.50人、妻では中卒2.56人に対して、大学・大学院2.48人で、中卒のほうがやや多い傾向がみられる。また、高学歴ほど晩婚傾向が見られるので、実際の子ども数も少なくなると報告されている。

すなわち、高学歴という要素は EPSI 得点を高くする方向に働き、次世代育成能力も高めるが、高学歴者の場合は、晩婚傾向などの理由で実際の出生力には繋がらないことがあると考えられよう。

3. “generativity” と世代継承

世代継承観について EPSI 得点の高低で検討した結果、高得点群は次世代への継承、親世代からの継承ともに積極的であった。前述したように“generativity”は生殖性のみなら

ず世代性とも訳されている。エリクソンは生殖性対停滞という成人期の対立命題からあらわれる新たな「徳」つまり「世話」は、「これまで大切に (take care) してきた人や物や観念の面倒をみる (take care of) ことへの、より広範な関与である」⁴⁾としており、西平によれば「エリクソンが強調するのは、この徳 (virtue) が世代継承過程を通じて受け継がれて行かなければならない」ということである⁹⁾。

世代継承過程は様々な場面が想定されるが、まずは家庭内についてみていく事とする。

家庭における価値観の継承については、平成10年度に高野らの行った調査で一部明らかとなっている。父母の価値観は、部分的に子どもへと受け継がれ、子ども世代で新たに生成された価値観と共に、さらにその次の世代へと受け継がれていた¹⁰⁾¹¹⁾。しかし「母から子へ」受け継がれる価値に比べ、「父から子へ」受け継がれる価値は少なかった。このことは、父と子が共有する時間の量的な劣勢、父子関係の希薄さを示しているのではないだろうか。家庭において、親から子へ価値観を伝えることができるだけの時間の保証と親子関係の充実が大切である。

そこで、本調査結果の家庭環境についてみると、EPSI 高得点群の育った家庭は、自由で開放的で、両親は互いに個を尊重していた。また、父母の回答者への接し方は、傾聴的であった。これらの結果をみると、家庭内のデモクラシーがどれくらい確立されているかを示していると言えよう。1994年国連の国際家族年で示された標語“Building the smallest democracy at the heart of society”の意味の再認識が望まれる。

子どもの発達に家庭環境が重要な関わりをもつことは多くの研究の示すところであるが、本調査の特徴は家庭外での人との交流の重要性を示したことである。

異世代や同世代との交流については EPSI 高得点群で多いと答えた割合が多かった。これまで育ってきて世話になったと思う人では、家族・親族では差がなく、学校の先生・先輩・上司・同僚では高得点群の割合が高かった。すなわち、家族・親族以外にどれだけの人に関わってきたかが、成人期の次世代育成能力に関連するといえる。

4. 生涯発達支援の視点

以上により、エリクソンのいう前成人期までの人間生活そのものの「蓄え」が大切⁴⁾であることが検証されたと言えよう。そして、このことは、成人期前までの若い世代へのケアの重要性和緊急性を示している。少子対策は多様性を帯びてきてはいるが、家庭子育て支援を軸としている点は変わっていない。平成13年度の厚生労働白書¹²⁾の標題には「生涯にわたり個人の自立を支援する」とあるが、個人の自立を支援するには、経済基盤のみならず生涯にわたる人格の発達を支援する視点が必要である。家庭支援を介した次世代の育成とともに、次世代の個人への直接支援により比重を置くことである。このことは、本調査結果から家庭外の人間関係の重要性を示したことから理解されよう。また、家庭支援において

は、育児支援のみならず、家族成員の個人が尊重され、自由で開放的な家庭の雰囲気づくりへの支援が、次世代育成力を育むこととなるであろう。

今回、年齢と EPSI 得点が、必ずしも直線的な関係にあるわけではないという結果も得られた。特に男性と女性との間での違いからは、EPSI 得点が様々なライフイベントに影響されることや、性によってその影響が異なることが推察できる。EPSI のような検査方法によって、個人の人生における、その時点のアイデンティティの状態を把握することは、個人への支援の際に役立つ一つの方法となろう。

V 結論

EPSI 総得点の高いこと、すなわち人格が成熟しバランスがとれていることが、次世代育成力を高めることを明らかにした。その発達促進には家庭環境、特に家庭の雰囲気、両親の夫婦関係、子どもへの接し方など家庭内の人間関係が重要であった。さらに家庭のみならず、地域・学校・職場などにおける、同世代・異世代を含めた多彩な人間関係が人格の成熟に寄与していた。成人に達する以前からの人との関係が重要であった。

わが国の成人世代の次世代育成力が低下していることが少子および子どもに関する様々な問題の原因であるとするなら、現在の成人への支援とともに、成人前の若い世代が豊かな人間関係の下に成長できる環境の整備が急務である。地域社会・職場環境を見直し、人格の生涯発達の観点から、あらゆる年齢層の個人に対する発達支援を行う視点が望まれる。

謝辞

本研究の調査は日本子ども家庭総合研究所のチーム研究¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾として行った。共同研究者 竹井操、内山絢子、故千賀悠子の各氏に深謝申し上げる。

引用文献

- 1) 鐘幹八郎. 同一性概念の広がりとその基本的構造. 鐘幹八郎, 山本力, 他編. 自我同一性の展望. 京都: ナカニシヤ出版; 1984. p85-6.
- 2) 岡本祐子. アイデンティティ生涯発達論の射程. 京都: ミネルヴァ書房; 2002. p16-18, 他.
- 3) L.J.フリードマン. エリクソンの人生-アイデンティティの探究者. (下). 東京: 新曜社; 2003. p106.
- 4) E.H.エリクソン. ライフサイクル, その完結. 東京: みすず書房; 1989. p88-9.
- 5) 中西信男, 佐方哲彦. EPSI—エリクソン心理社会的段階目録検査—. 上里一郎, 監修. 心理アセスメントハンドブック, 第2版. 新潟: 西村書店; 2001.6. p.365-76.
- 6) 日本子ども家庭総合研究所. 日本子ども資料年鑑 2003. 名古屋: KTC 中央出版; 2003. p.232.
- 7) 国立社会保障・人口問題研究所. 第11回出生動向基本調査・結婚と出産に関する全国調査・独身者調査. 東京: 国立社会保障・人口問題研究所; 1998.
- 8) 中西信男. 人間形成の心理学. 京都: ナカニシヤ出版; 1989. p.72-5, 107-10.
- 9) 西平直. エリクソンの人間学. 東京: 東京大学出版会; 1993. p.44.
- 10) 高野陽, 他. 厚生科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業「少子化についての専門的研究」平成11年度報告書; 2000.
- 11) 高野陽, 他. 厚生科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業「少子化についての専門的研究」平成10年度報告書; 1999.
- 12) 厚生省, 監修. 厚生労働白書 平成13年度版. 東京: ぎょうせい; 2001.9.
- 13) 宮原忍, 他. 少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究(第一報) 文献研究. 日本子ども家庭総合研究所紀要 2001; 第37集: 87-115.
- 14) 宮原忍, 他. 少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究(第二報) 次世代育成に関するアンケート調査結果. 日本子ども家庭総合研究所紀要 2002; 第38集: 151-63.
- 15) 宮原忍, 他. 少子社会における個人および社会の養育力に関する母子保健学的研究(第三報) 次世代育成に関するアンケート調査, 分析と総括. 日本子ども家庭総合研究所紀要 2003; 第39集: 151-67.

参考文献

- 1) E.H.エリクソン, J.M.エリクソン, H.Q.キヴニク. 朝長正徳, 朝長梨枝子, 訳. 老年期?生き生きとしたかわりあい. 東京: みすず書房; 1990.
- 2) E.H.エリクソン. 仁科弥生, 訳. 幼児期と社会 1. 東京: みすず書房; 1977.
- 3) E.H.エリクソン. 仁科弥生, 訳. 幼児期と社会 2. 東京: みすず書房; 1980.